

大坪遺跡 発掘調査報告書

1991

山形県
山形県教育委員会

おお つぼ
大 坪 遺 跡
発掘調査報告書

平成 3 年 3 月

山 形 県
山形県教育委員会



SB 1 建物跡(南より)



SB 2・3 建物跡(南より)

序

本書は、平成2年度に山形県教育委員会が発掘調査を実施した大坪遺跡の調査成果をまとめたものです。

大坪遺跡は山形県の北西部に位置する遊佐町にあります。遊佐町は、出羽富士と呼ばれる鳥海山の麓一帯を行政区域として、庄内地方でも有数な米穀地帯であります。

調査では、平安時代の掘立柱建物跡・土壤・柱穴・溝状遺構・川跡などの遺構、遺物は、土師器・須恵器・赤焼土器、土製品として土錘・土製リング・古銭など、他に縄文時代の磨製石斧・石斧・石器、中世の陶器などが出土しています。

遺跡は一度壊してしまえば二度とは元に戻らないものです。埋蔵文化財は私たちの先祖が長い歴史の中で創造し育んできた貴重な国民的財産といえます。調査により明らかにされた遺跡は過去の生活の有様を彷彿と再現してくれるものです。祖先の歴史を学ぶとともに愛護し子孫へと保存し伝えていくことが、現代に生きる私たちに課せられた重要な責務といえるでしょう。

山形県教育委員会では、「心広くたくましい県民の育成」と地域文化の環境作りをすすめるために、今後とも県民福祉の向上を目的とした地域社会の整備と調整をはかりながら、埋蔵文化財の保護に努力を続けていく所存であります。

本書が埋蔵文化財に対する保護思想の普及もかねまして、皆様のご理解の一助となれば幸いと存じます。

最後になりましたが、調査に御協力をいただいた地元の方々をはじめ関係各位に心から感謝申し上げます。

平成3年3月

山形県教育委員会教育長 木場清耕

例　　言

- 1 本報告書は山形県農林水産部の委託を受けて、山形県教育委員会が平成2年度に実施した県営ほ場整備事業に伴う大坪遺跡（月光川右岸地区）に係る緊急発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は平成2年4月23日～同年6月29日まで、延べ45日間にわたって実施した。
- 3 遺跡の所在地は山形県飽海郡遊佐町大字野沢字大坪他に所在する。
- 4 調査体制は下記のとおりである。

調査主体 山形県教育委員会
調査担当 山形県埋蔵文化財緊急調査団
調査担当者 事務局長補佐 佐々木洋治
　　　　　　調査班長 安部 実
　　　　　　主任調査員 月山 隆弘
　　　　　　主任調査員 須賀井新人
事務局 事務局長 土門 紹穂
　　　　　　事務局長補佐 斎藤 久子
　　　　　　経理班長 佐藤 庄一・野尻 侃
　　　　　　主任事務員 新関 紘子・賣間 秀男
　　　　　　永井 健郎・渡江 正義

- 5 発掘調査にあたっては遊佐町教育委員会、月光川土地改良区、月光川土地改良事務所、庄内教育事務所など関係機関の協力を得た。
- 6 本書の作成は月山隆弘が担当した。編集は月山隆弘、安部 実が担当し、全体の総括を佐々木洋治が行った。
- 7 調査記録および出土遺物については、山形県教育委員会が一括保管している。

凡　例

- 1 本書で使用した遺構記号は下記の通りである。
SB…建物跡、SK…土壤、SD…溝状遺構、SG…旧河川、EB…柱穴、EP…小穴、
SX…不明遺構
- 2 遺構番号は基本的に現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲している。
- 3 遺物に付した記号は、RP(土器・土製品)、RQ(石製品)、RW(木製品)、RM(金属製品)であり、遺構内での検出順にしたがって番号を付した。
- 4 報告書作成・執筆の基準は下記のとおりである。
 - (1) 遺構分布図、同平面図中の方位は磁北を示している。なお、グリッドの南北「Y」軸は磁北よりN-12°-Eに傾いている。また建物跡の主軸方向は、南北棟を桁行で東西棟を梁行で測定した。
 - (2) 遺構実測図では1/40、1/50他の縮図で採録し、各々にスケールを付した。
 - (3) 遺物実測図・拓影図は原則的に1/2、1/3、1/4で採録したが、大型の土器は1/6とし、各々にスケールを付した。
 - (4) 土器実測図・拓影図の断面では、白ヌキが土師器、網点が赤焼土器、黒ベタが須恵器を表している。また土師器で内黒のものは内面に網点を入れた。
 - (5) 遺物観察表中の計測値欄で、()内数値は図上復元による推計値ないし残存値を示している。出土地点欄の層位では「F」は遺構覆土内出土、「Y」は遺構底面出土を表示し、ローマ数字「I～IV」等は、遺跡を覆う土層(基本層序)を表している。
 - (6) 遺物写真は、原則的に小形の坏類が1/3、大形の遺物については1/6、土龜等の小遺物は1/2とし、挿図毎にスケールを付した。
 - (7) 遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・遺物図版とともに共通したものとした。

目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	1
2 調査の方法と経過	1
II 遺跡の概観	
1 遺跡の立地と環境	3
2 歴史的環境	3
3 遺跡の層序	7
4 遺構と遺物の分布	7
III 検出遺構	
1 建物跡	8
2 土壙	12
3 溝状遺構・河川跡	17
IV 出土遺物	
1 土器	18
2 その他の遺物	19
V まとめ	26

表

表 1 遺構観察表	16
表 2 遺物観察表	25

挿 図

第1図 遺跡位置図	2	第10図 SK100・170・174・175・176・177・ EP171・172・173	15
第2図 遺跡全体図	4	第11図 SK180・260	16
第3図 遺構分布図	5	第12図 SD300	17
第4図 土層柱状図	7	第13図 出土土器（1）	19
第5図 SB1建物跡	9	第14図 出土土器（2）	20
第6図 SB2建物跡	10	第15図 出土土器（3）	21
第7図 SB3・4建物跡	11	第16図 出土土器（4）	22
第8図 SK13・31・32、EP28・29・70・101・ 128	13	第17図 出土土器（5）	23
第9図 SK51・52・200、EP53・54・56 SD55、SX50	14	第18図 出土遺物	24

図 版

図版1 遺跡遠景	SK174土壤完掘状況、SK174 (RP11他)出土状況他
図版2 遺跡近景・調査風景	
図版3 遺構検出状況	SK200土層セクション、SK200 RP15・16出土状況
図版4 SB1建物跡・SB2建物跡	SD300河川跡、SD300遺物出土状況他
図版5 SB3・4建物跡・調査区全景	SD300河川跡東壁・南壁土層断面
図版6 SB1・2建物跡・調査区全景	SD300土器出土状況、SD300遺物 出土状況他
図版7 SK10・11土層セクション、SK10完 掘状況他	
図版8 EP30完掘状況、EP28・29土層セクション他	出土土器（1）
図版9 SK31・32完掘状況、SK31・32土層 セクション他	出土土器（2）
図版10 EP40完掘状況、EP50柱穴完掘他	出土土器（3）
図版11 SK51・52、EP53・54、SK51土層セクション他	出土土器（4）
図版12 SK56(RP9・10)出土状況、EP62土 層セクション	出土土器（5）
図版13 SK100土層セクション、EP120・ RP8出土状況他	出土遺物
	調査風景
	調査風景

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

遊佐町には大坪遺跡を始め数多くの遺跡が確認されており、県内市町村の中でも遺跡の確認されている数が多い町である。本遺跡は以前から水田耕作時に土器片などが出土していた。公には、昭和38・51年に行われた遺跡確認調査によって平安時代の集落跡として確認され、県遺跡台帳に2110番として登載された。

本遺跡は県営ほ場整備事業（月光川右岸地区）との関連から、昭和63年12月に遺跡詳細分布調査が実施された経緯があり、遺跡規模や遺物包含層の有無のほか概要がほぼ判明していた。平成元年度にも上記関連の補足的な分布調査、及び広域営農団地農道整備事業（庄内東部III期）が遺跡を縦断することから、試掘調査及び立ち会い調査が行われた（山形県埋蔵文化財調査報告書第148集）。この調査では土壙や溝状遺構が確認され、平安時代の土器類が出土している。

平成2年度には県営ほ場整備事業（月光川右岸地区）が本遺跡にもかかることとなった。県教育委員会では文化財保護の立場から関係公所と分布調査の結果をもとに協議を重ねた結果、平成2年度に県教育委員会が主体となって事業に先立って緊急発掘調査を行うこととなった。

2 調査の方法と経過

今回の発掘調査地区は、平成元年11月に行った広域営農団地農道整備事業（庄内東部III期）に伴う立ち会い調査地区（すでに道路が施設されている）の東側に隣接する。

始めに調査対象区域内に広域農道計画法線のセンター杭を基準として、 $5 \times 5\text{ m}$ の地割り（グリッド）を昨年度の調査区と対応できるように設定した。X軸は西から東へ1から10グリッド、Y軸は北から南へ1から21グリッドの座標とした。南北の軸は磁北で東へ12度傾く。

調査区域内南側にある東西に走る農道は今回の調査対象区から除外した。調査区がこの農道を挟んで二つに分かれるため、北側をA区、南側をB区と呼称した。

次に遺構検出面までの深さを確認するためと、田面の排水をとるため調査区周辺に1m幅のトレンチを設けた。このトレンチで確認された遺構面までの深さをもとに、重機械を使用して調査区の表土を除去した。その後、遺構確認面まで人力により掘り下げ、面削りをおこない遺構遺物の検出に務めた。さらに堆積土との土色変化により確認できた遺構を掘り下げていった。

A区とB区を合わせた調査面積は3,000m²である。



第一図 遺跡位置図 ($S = 1 : 25,000$)

遺跡名	時期・種別	遺跡名	時期・種別
1 大坪遺跡	平安・集落跡	9 三田遺跡	平安~鎌倉・集落跡
2 東田遺跡	平安・集落跡	10 袋冷遺跡	平安~鎌倉・散布地
3 下長橋遺跡	平安・集落跡	11 古屋敷遺跡	平安・包蔵地
4 浮橋遺跡	平安末~鎌倉・集落跡	12 宅田遺跡	绳文・平安・集落跡
5 水尻遺跡	平安末~鎌倉・集落跡	13 石田遺跡	平安・集落跡
6 大堀遺跡	鎌倉・城館跡	14 上高田・道内・木戸下	平安・散布地
7 小深田遺跡	平安・集落跡	15 道中遺跡	平安・集落
8 丸ノ内館	江戸・城館跡	16 宮の下遺跡	平安~鎌倉・集落跡

II 遺跡の概観

1 遺跡の立地と環境

大坪遺跡は、山形県飽海郡遊佐町大字大坪字野沢に所在する。JR羽越本線遊佐駅の北東約2km、野沢集落の南西部に東西、南北ともに約300mの規模で広がり、遊佐町大字野沢字大坪を中心とした水田中に位置している。

庄内平野の北部を含める飽海地区は、月光川・日向川・高瀬川等の河川が出羽丘陵から西に向かって流れ、平野部の出口には小扇状地を形成している。平野の主要部分は庄内三角州地帯であり、海拔5~15mときわめて低い平地である。日本海沿岸の砂丘地帯の肥沃な沖積平野でもある。

庄内平野は、県内においても夏は浜風の影響でわりあい涼しく、冬は北西の風がもたらす強風で積雪は少ないものの、地吹雪で一寸先も見えなくなる日がある。

本遺跡の北側を西流する高瀬川は、秀峰鳥海山より発する水源を集め、蛇行しながら日本海へと注ぎ、遺跡は高瀬川左岸がつくり出した自然堤防上に立地し、標高約11mを測る。遺跡範囲内の高低差はほとんどないが、遺跡周辺では東側が高く、西に行くほど低くなる。遺跡の範囲内は現在のように平坦な地ではなく、起伏があったものと思われる。

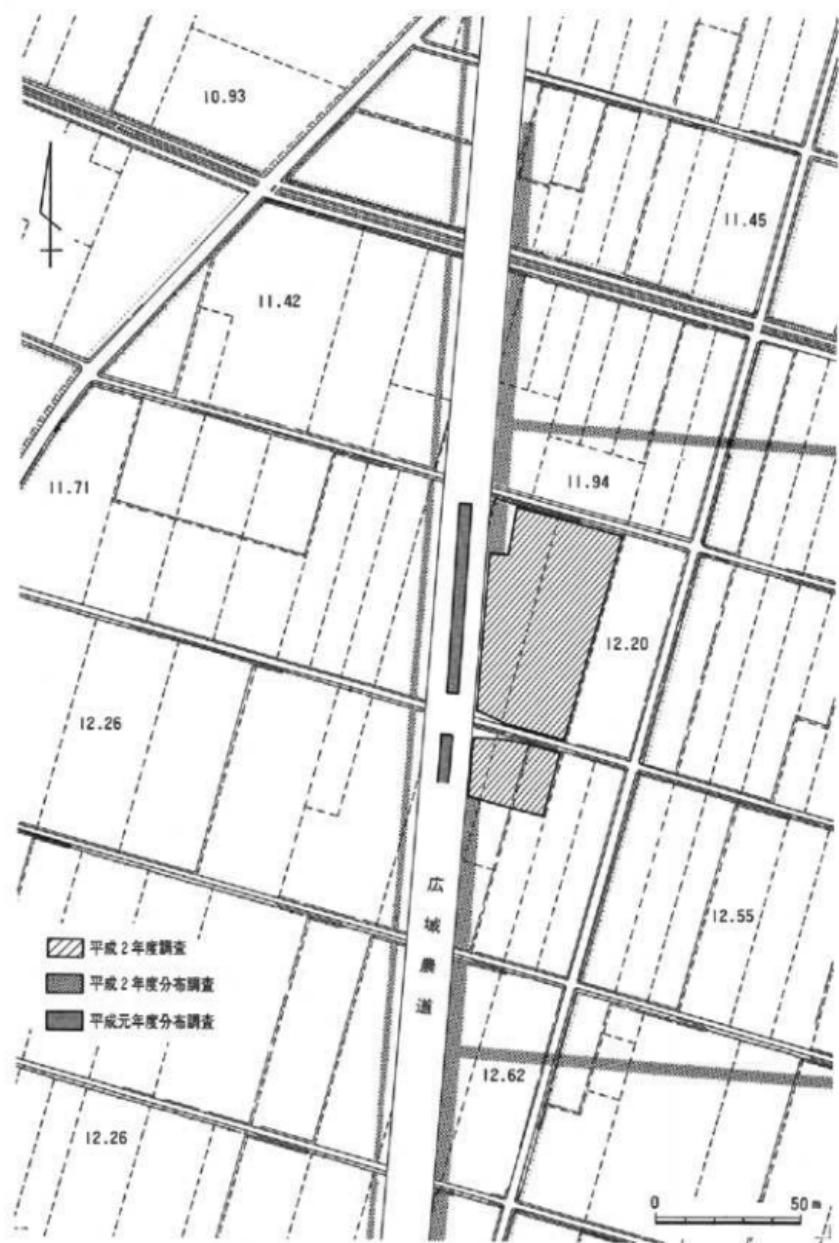
2 歴史的環境

遊佐町には大坪遺跡をはじめ180ヶ所あまりの遺跡が登録されている。時代も旧石器時代から中世・江戸時代までの長い間にわたっている。

後期旧石器では、ナイフ形石器が採集された金俣A・F遺跡、細石刃石器群が出土した宮坂F遺跡、縄文時代早期では、表裏縄文の土器が出土した金俣B遺跡がある。特に、縄文時代前中期から中期初頭の竪穴住居跡やフラスコ状土壤群が検出された吹浦遺跡は昭和28年に県指定史跡になっている。

古墳時代の遺跡はあまり確認されていないが、奈良時代から平安時代の遺跡は、平野部や川筋に多くの遺跡が点在し、山麓部には館跡や窯跡が確認されている。本遺跡の周辺にも、同じく自然堤防の微高地上に立地すると考えられる石田・宅田遺跡や、宮の下・道中遺跡等が点在し、平安時代の集落跡群が想定される。また、月光川左岸地区には昭和63年に発掘調査を実施した浮橋・下長橋・小深田遺跡、今年度調査の東田遺跡がある。また、鎌倉時代の地方豪族の館跡と考えられ、角材列に囲まれた礎石の建物跡等が検出されている大柄遺跡が存在している。

近年、様々な開発が進む中で発掘調査が行われ、遊佐町のひいては庄内地方の古代の様子が明らかになることは、今後の歴史解明になお一層の期待がかけられる。



第2図 遺跡全体図

1 + 3 + 5 + 7 + 9 + 11 + 13 + 15 + 17 + 19 + 21 X軸



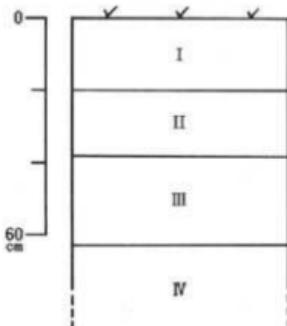
第3図 遺構分布図

3 遺跡の層序

遺跡は高瀬川の左岸段丘上に位置し、高瀬川がつくりだした自然堤防上に立地する。

層序は、A調査区東・南壁（SD300）の観察により、I～IV層に分けられる。

I層：褐色壤土（表土）。II層：灰黄褐色壤土（上部耕作土、砂質を帯びる）。III層：黒褐色土（粘土質を帯びる、下部ほど粘性が強い、上部遺構検出面、遺物包含層）。IV層：にぶい黄褐色土（黒褐色壤土をブロック状に混入、炭化物、粘土化した有機物を含む、遺物包含層）。



第4図 土層柱状図

本調査でA調査区南側が東西方向に台地状の微高地となっていることを確認している。平成元年度調査区（分布調査）においても、この微高地につながると考えられる所に遺構が多く見られる。

遺構の確認はIII層上面であり、遺物包含層は、III層内及びIV層上面である。

4 遺構と遺物の分布

本遺跡で登録した遺構は300基を数える。

遺構の分布は、A調査区南側（2～9-7～19G）に集中して検出されている。A調査区北側（1～10-1～6G）付近、B調査区（2～5-17～21G）付近にはSD300以外、遺構の検出は認められない。

建物跡（SB1～4）はA調査区のほぼ南半分に検出している。SB3・4は重複して確認された。また、SB3・4は調査区外に延びるものと推定される。

土壤・柱穴・溝状遺構なども、ほぼA調査区南半分で検出された。河川跡（SD300）はA調査区南東隅からB調査区北西側にかけて若干南側にカーブして検出された。川幅は、調査区外にもかかり確認できない。

遺物の分布は、遺構の分布とほぼ同様で、A調査区南側（2～9-7～16G）、B調査区北西側（2～4-17～19G）、III層内とIV層上面の黒褐色・黄褐色壤土の包含層及び遺構内より出土している。

SD300（2～8-15～20G）の川際2～3層より、半完形の土師器、須恵器、赤焼土器の壺・壺・甕・部材などが多く出土しており、本遺跡で出土した遺物の過半数を占める。ただし、遺構内の出土遺物の量は多いとはいえない。

III 検出遺構

1 建物跡

調査で建物跡は4棟が構成できた。これらはすべて掘立柱建物跡であり、調査区の中央部で確認された。2棟はほぼ南北に長軸をもつ。柱間は5~7尺を測り、確認面からの深さ20~38cmである。以下確認された順に記述する。

SB 1 建物跡（第5図 図版4）

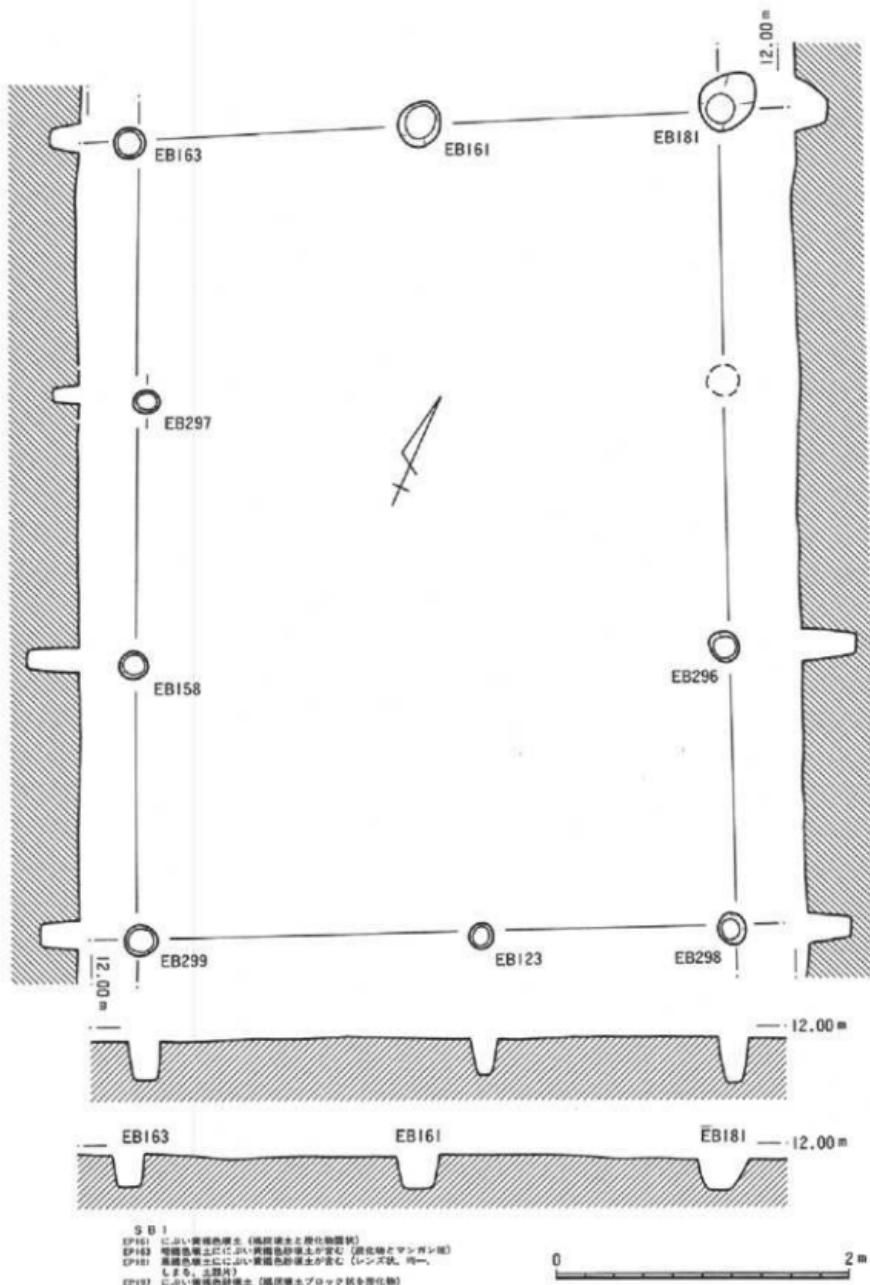
調査区の中央部やや北側、(4・5・7~9G)に位置し、標高11.80~11.90m、III層上面で確認された。桁行3間、梁行2間の規模になり、南北棟に長軸をもつ掘立柱建物跡である。大きさは、東西4.05m、南北5.60mでN-19°-Wを測る。柱間距離、西面桁行EB163~297間、EB297~158間が各々1.75m・EB158~299間、1.85m、東面桁行EB296~298間、1.90mを測る。東面EB181~296間には柱穴を確認していない。南面EB299~123間、2.30m、EB123~298間、1.70m、北面梁行EB163~161間、EB161~181間、各々2.00mを測る。桁行、梁行の間尺は若干異なるが各面の柱間はほぼ一定である。掘り方の平面形は円形で、径16~44cm、確認面からの深さ20~38cmを呈する。掘り込みはEB181以外ほぼ垂直である。

SB 2 建物跡（第6図 図版4）

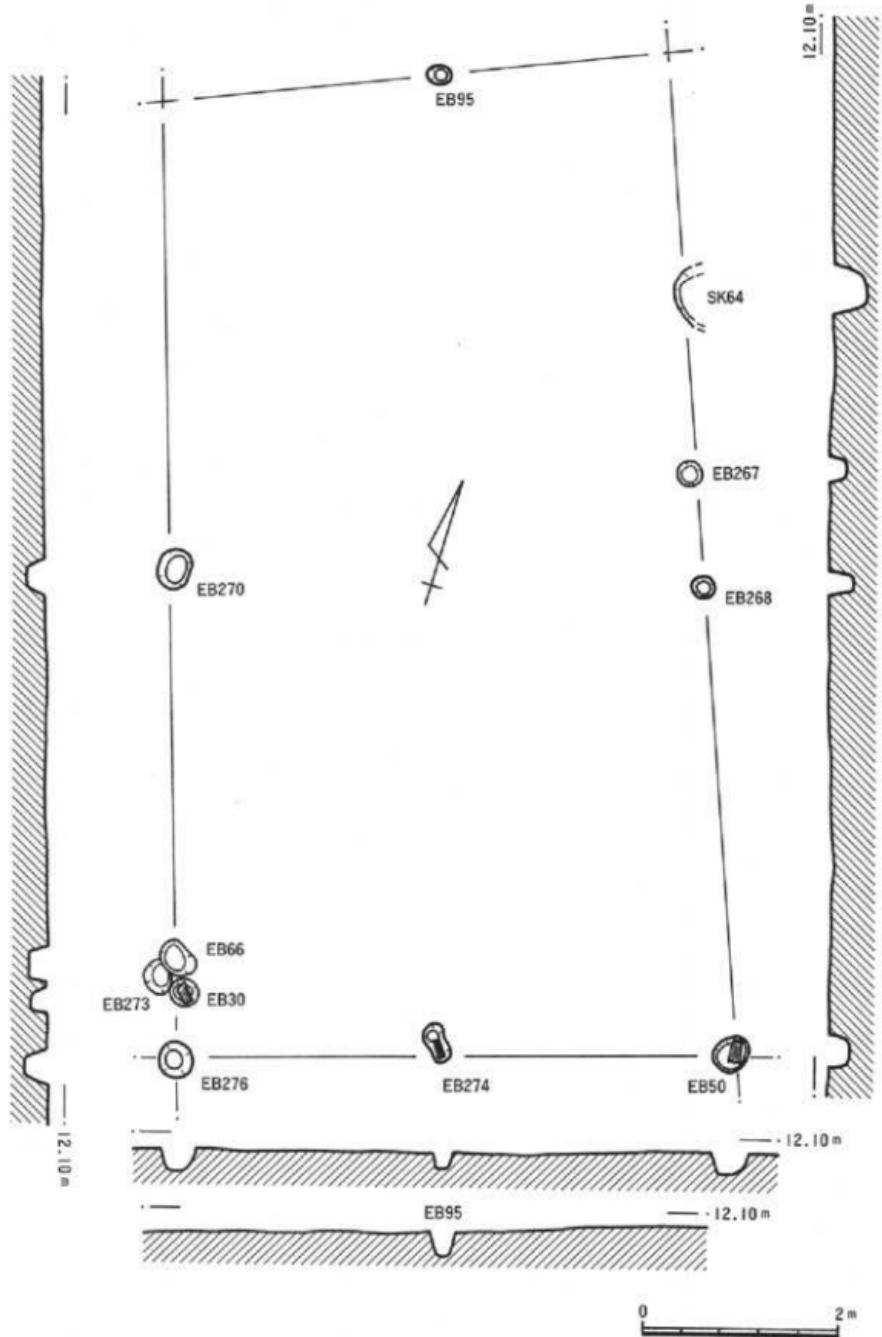
調査区の中央部西側、(3~5~12~14G)に位置し、標高11.90~12.00m、III層上面で確認された。北面東・西隅の柱穴は確認していない。桁行2間、梁行2間の規模になり、南北棟に長軸をもつ掘立柱建物跡である。大きさは、東西5.75m、南北約10.00m、N-15°-Wを測る。柱間距離、西面桁行EB270~276間5.00m、東面桁行EB268~50間4.85m南面梁行EB276~274間、2.75m、EB274~50間、2.95mを測る。掘り方の平面形は円形で、径20~40cmと小さく、確認面からの深さ20~26cmと浅い。EB274・50柱穴には柱痕が現存する。掘り込みはほぼ垂直である。

SB 3 建物跡（第7図 図版5）

調査区の中央部東側(8~11~13G)に位置し、標高11.90m、III層上面で確認された。北東側は調査区外になっており未確認である。全体の大きさは不明であるが、確認長桁行2間、梁行1間の規模になり、南北棟に長軸をもつ掘立柱建物跡と推定される。検出長、東西2.4m、南北4.1m、N-29°-Eを測る。柱間距離、西面桁行EB212~214間、2.05m、EB214~220間、2.05m、南面梁行EB220~219間、2.30mを測る。掘り方の平面形は梢円形で、径50~75cmと大きく、確認面からの深さ20~25cmと浅い。EB220柱穴には柱痕が現存する。掘り込みはほぼ垂直である。



第5図 SB I 建物跡

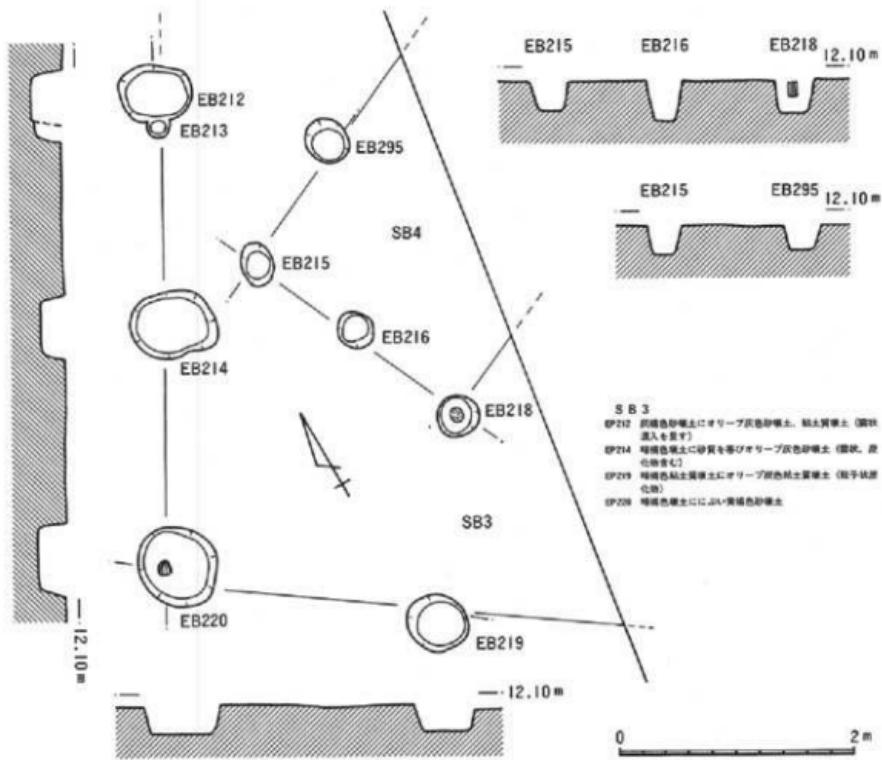


SB 4 建物跡 (第7図 図版5)

調査区の中央部東側 (8-11・12G) SB 3 内に位置し、標高11.90m、Ⅲ層上面で確認された。北東側は調査区外になっており未確認である。全体の大きさは不明である。確認長桁行1間、梁行2間の規模になり、北東・南西棟に長軸をもつ掘立柱建物跡と推定される。検出長、北東・南西1.35m、南東・北西2.15m、N-55°-Eを測る。柱間距離、桁行西側EB295～215間、1.35m、EB215～216間、1.05m、EB216～218間、1.10mを測る。掘り方の平面形はほぼ梢円形で、径27～41cm、確認面からの深さ20～35cmである。EB218柱穴には柱痕が現存する。掘り込みはほぼ垂直である。

SB 1～4 内柱穴からの、遺物の出土は僅かである。

時期は、建物跡の検出状況や配置関係から、10世紀中頃から後半、平安時代と推定される。



2 土 壤

調査で土壤として登録した数は16基を数える。これらは平面形や断面形、あるいは覆土の堆積などからいくつかの形態に分類することができるが、図示した主な遺構については表1にまとめ、覆土内に完形土器または多数の土器片を包含する土壤について概述する。

SK32 (第8図 図版9)

中央部西側3・4-11・12G、III層上面で検出された。平面形は不整形を呈する。北側で重複しSK31を切る。規模は南北長軸2.35m、東西短軸1.73m、確認面からの深さ17cmを測る。掘り込みは急傾斜、床面はほぼ平坦である。覆土は4層に分かれ、層上部は黒褐色土、下層は酸化する黄灰色土になっている。層上部より遺物(赤焼土器RP4~7)が出土している。

SK51・52 (第9図 図版11)

中央部西側4-11G、III層上面で検出された。平面形は梢円形を呈する。SX50と重複し、SK51・52が切っている。規模は各々1.26m、86cm・1.31m、1.00m、確認面からの深さ10cm、15cmと浅い。掘り込みは各々緩やか、床面は鍋底状である。2~3層に分かれ、炭化物を含む黒・暗褐色土である。覆土より須恵器、壺が出土している。

SK174 (第10図 図版14)

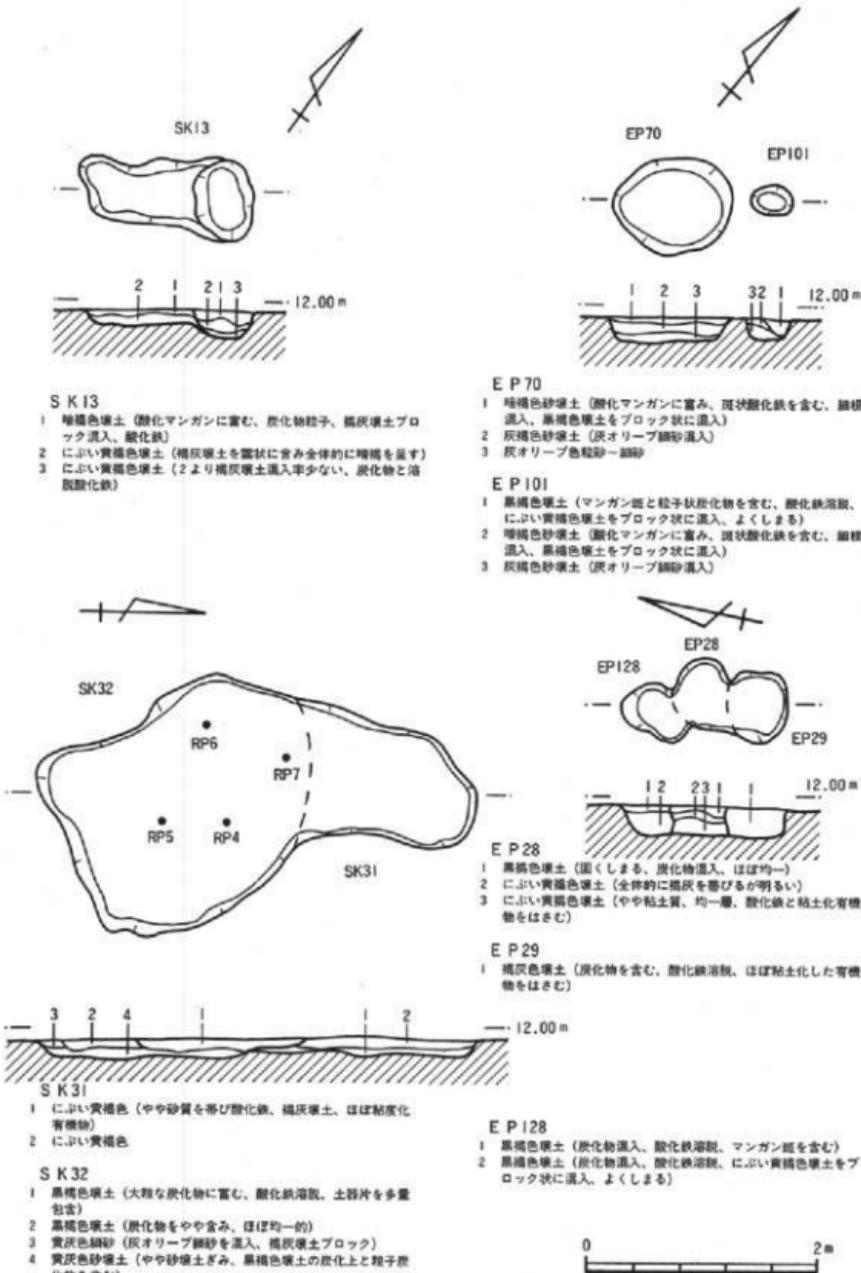
北東側7-9G、III層上面で検出された。平面形は不整形を呈する。西側で重複しSK175を切る。規模は南北長軸1.58m、東西短軸1.28m、確認面から12cmと浅い。炭化物層の1層である。覆土上部より遺物(赤焼土器RP12他)が出土している。

SK180 (第11図 図版13)

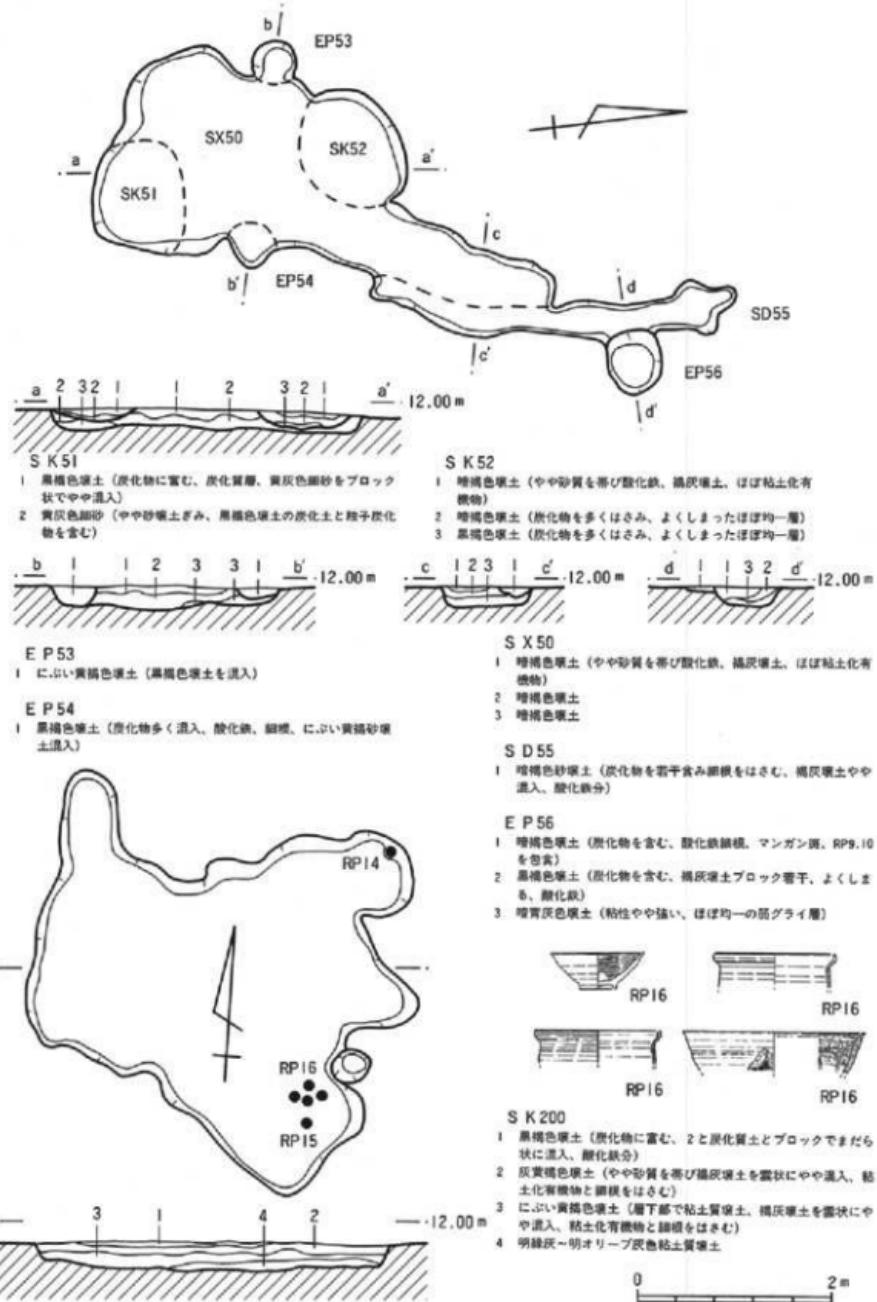
北東7・8-9G、III層上面で検出された。平面形は略円形を呈する。規模は長軸1.43m、短軸1.30m、確認面からの深さ19cmを測る。掘り込みは急傾斜、床面は平坦である。覆土は3層に分かれ、全体的に灰色を帯び1・2層が灰黄色、3層が灰色から暗オリーブ灰色土になっている。

SK200 (第9図 図版15)

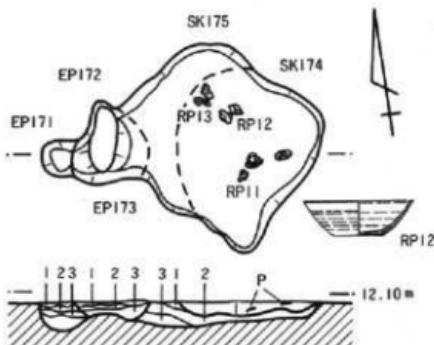
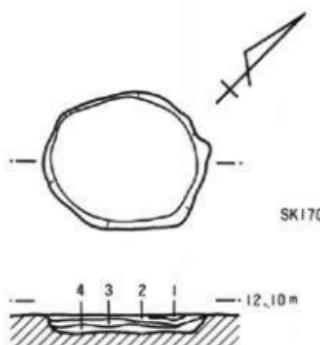
中央部東側5・6-13・14G、III層上面で検出された。平面形は不整形を呈する。規模は長軸4.82m、短軸1.99m、確認面からの深さ28cmを測る。掘り込みは急傾斜、床面はほぼ平坦である。覆土は4層に分かれ、1層黒褐色土から4層明オリーブ灰色粘土質土と下層になるにつれて明るく粘土質になる。層上部より遺物RP16(土師器壺・赤焼土器壺)数点が出土している。



第8図 SK13・31・32、EP28・29・70・101・128



第9図 SK51-52-200, EP53-54-56, SD55, SX50



S K 170

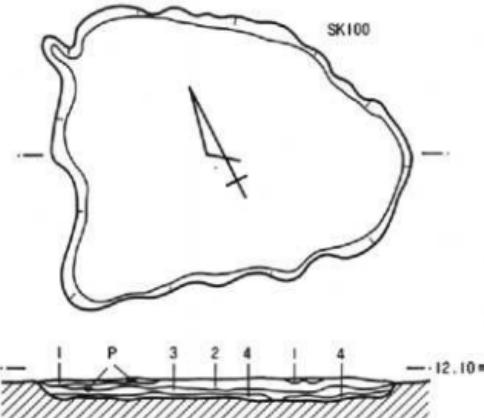
1 腐化物層 (焼土と灰を伴う)
 2 に、ない黄褐色壤土、弱グライ化、明青灰 (酸化鉄とマンガン斑に富む、腐化物と1をブロック状混入)
 3 に、ない黄褐色壤土 (オリーブ褐色細砂～粗砂を多量に混入、酸化鉄)
 4 オリーブ褐色細砂～粗砂 (オリーブ黒粗砂を部分的混入)

S K 174

1 腐化物層 (堆積壤土をブロック状混入、RP11～13他土器片を多量に含むする)

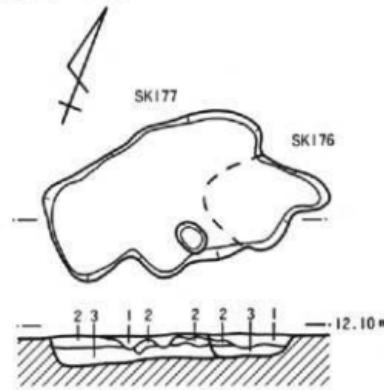
S K 175

1 に、ない黄褐色壤土 (腐化物層をブロック状に混入、褐化壤土層状に入る、酸化鉄)
 2 に、ない黄褐色壤土 (褐化壤土層状混入、沿岸酸化鉄)
 3 に、ない黄褐色粘土質壤土



S K 100

1 腐葉褐色壤土 (腐化物を多く含む、堆積色壤土を露状で多量に混入)
 2 褐黃褐色壤土 (腐化物とほば粘土化した有機物を少量含む)
 3 褐黃褐色壤土 (オリーブ褐色細砂～粗砂を多量に混入、酸化鉄)
 4 に、ない黄褐色粘土質壤土

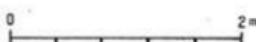


S K 176

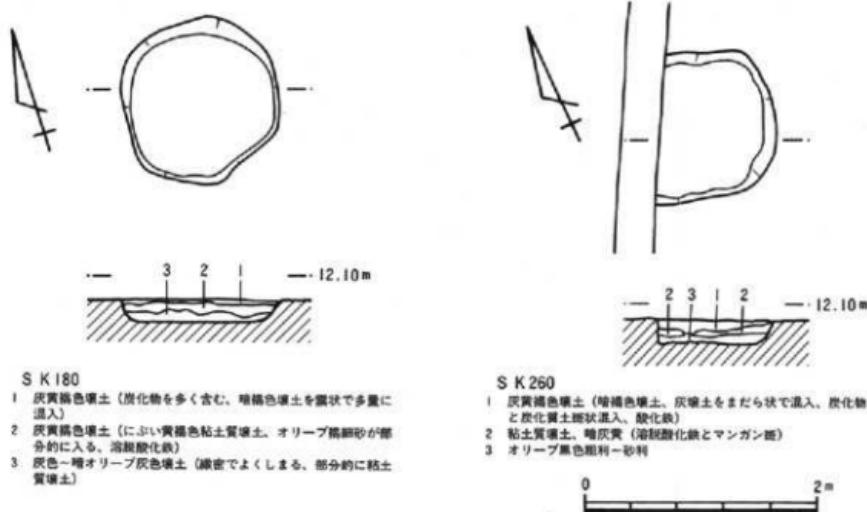
1 嗜糞褐色壤土 (腐化物を含む、糞糞褐色壤土ブロックをやや混入するが他の同一で固くしまる)
 2 褐黃褐色壤土 (オリーブ褐色細砂～粗砂を露状に混入)
 3 に、ない黄褐色、オリーブ灰色粘土質壤土 (層下部に向かうにつれグライ化)

S K 177

1 嗜糞褐色壤土 (やや灰ぎみ)
 2 褐黃褐色壤土 (オリーブ褐色細砂～粗砂を露状に混入)
 3 褐黃褐色壤土
 4 に、ない黄褐色粘土質壤土



第10図 SK100・170・174・175・176・177、EP171・172・173



第II図 SKI 180・260

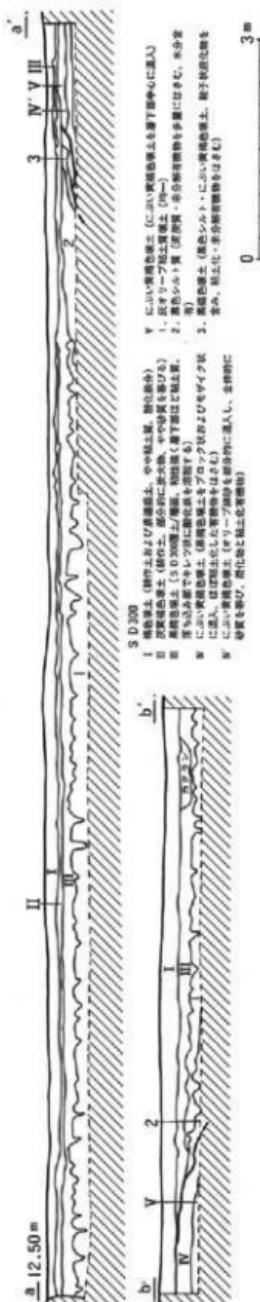
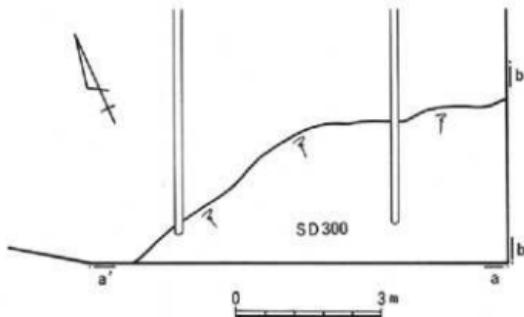
表 I 遺構観察表

登録番号	検出地点 (G)	平面形	規模 (cm)		深さ (cm)	底面の状態	備考
			長径	短径・幅			
SK 13	3-10-11	椭円形	71	× 50	23	ほぼ平坦	
EP 28	3-11	不整形	72	× 48	26	平坦	
EP 29	3-11	略円形	64	× (50)	26	平坦	
SK 31	3-12	不整形	187	× 98	14	凹凸	
SK 32	3-4-11-12	不整形	(235)	× 173	17	ほぼ平坦	R P 4-5-6-7
SX 50	4-14	不整形	483	× 73	20	平坦	
SK 51	4-11	椭円形	126	× (86)	10	鍋底状	
SK 52	4-11	椭円形	131	× (100)	15	鍋底状	
EP 53	3-4-11	円形	(47)	× 43	21	平坦	
EP 54	4-11	略円形	(46)	× (42)	11	やや傾斜	
SD 55	4-10-11	不整形	58	× (11)	9	急斜面	
EP 56	4-10	椭円形	65	× 53	18	平坦	R P 9-10
EP 70	3-10-11	略円形	102	× 80	21	ほぼ平坦	
SK 100	6-7-11	不整形	330	× 228	16	ほぼ平坦	
EP 101	3-10	椭円形	34	× 26	18	平坦	
EP 128	3-11	不整形	54	× 40	24	平坦	
SK 170	6-7-9	略円形	147	× 116	16	ほぼ平坦	
EP 172	7-9	椭円形	(56)	× (24)	(31)	平坦	
EP 173	7-9	不整形	(68)	× 60	16	ほぼ平坦	
SK 174	7-9	不整形	158	× 128	12	凹凸	R P 11-12-13
SK 175	7-9	不整形	180	× 156	20	ほぼ平坦	
SK 176	7-10	不整形	(108)	× 74	11	ほぼ平坦	
SK 177	7-10	不整形	192	× 90	25	平坦	
SK 180	7-8-9	略円形	143	× 130	19	平坦	
SK 200	5-6-13-14	不整形	482	× 199	28	ほぼ平坦	R P 14-15-16
SK 260	6-7	不整形	150	× 99	22	平坦	

3 溝状遺構・河川跡

溝状遺構として登録したものは7条ある。調査区北側、4~8~9~13Gの微高地、Ⅲ層下で確認された。溝跡の全体的な規模は、確認面で、長さ1~3m、幅20~30cm・深さ10~25cmと小規模である。溝跡のほとんどが南北方向に走っており、断面形はU字状を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は黒褐色壤土の一層がほとんどである。出土遺物は、土師器高台坏SD135(第13図5)がある。他溝跡からの遺物の出土は少なく若干の破片資料である。出土遺物より、10世紀中~後半と推定される。

SD300河川跡はA区南側・B区北側1~8~15~19Gにまたがって検出された。A区からB区にかけて南側に若干カーブし、蛇行している。A区南壁・東壁の土層断面においてIV層下を掘りこんでいることが確認された。東側と西側は調査区外であるが、東西側に延びるものと考えられる。また、B区東側において川幅は確認されなかつた。検出長、長さ約22m、幅10m以上と推定される。堆積土は、2層黒色シルトの泥炭層が厚く、未分解有機物を多量に含んでいる。遺物は川際に多く、堆積土F1~3層より土師器・須恵器・赤焼土器の坏・甕(第13図2・6・7、第14図12・13・15・20、第15図30・31・35~37・40~42・44、第16図45・50・52・53・55、第17図56・59)、羽釜(第18図62)等が出土している。これらの出土遺物により、10世紀中頃と推定される。



第12図 SD300

IV 出土遺物

本遺跡から出土した遺物は整理箱にして40箱である。そのほとんどが土器（土師器・須恵器・赤焼土器）である。他に土製品（土錘・土製リング・羽釜・焼台）、中世陶器、石器（縄文時代）、木質遺物、古錢、鉄製品、砥石、種子などがある。これらの遺物の半数以上は遺構内から出土している。包含層より出土した遺物の大半は平安時代に属する。図示した各土器の概要については表2にまとめ、ここでは主な遺物について概述する。

1 土 器

土師器、壺・甕（第13図1～9 図版19・20）

(1) 外面横方向ヘラナデ、内面横縦方向のヘラケズリが認められ、黒色処理を施している。底部は欠損している。(2) 外面ナデ、内面は横斜方向のケズリが認められる。口縁部のみであるが、体部は丸みを帯びている。外面口縁部直下にロクロ痕の凹凸が認められる。(3) 外面ナデ、内面横方向のミガキ黒色処理を施している。口縁部は欠損しているが、体部は底部から口縁部にかけて、急激な立ち上がりをもつ。(5～8) 高台付壺で、黒色処理を施している。(5) 器内外面ともにヘラミガキ調整がある。口縁部直下にロクロの凹凸が顕著に見られる。(6) 外面ロクロ、内面ミガキ調整があり、高台付である。

(7) 器内外面ともにヘラミガキ調整、内面は黒色処理を施している。高台脇には工具調整の跡が顕著に認められる。(9) 口縁部外面にナデ、体部外面縦方向、内面横方向のハケ目調整が認められる。土師器の甕はこの1点のみである。

須恵器、皿・蓋・壺・壺・甕（第14図11～18・21～29 図版19・20）

皿・蓋は各々1点のみの出土である。皿は内外面ともにナデで、内面には墨痕が認められる。硯に転用されていた可能性がある。蓋は抓部のみで大きさなどは不明である。

壺の器内外面ともにすべてロクロナデである。(13) 底部が小さく、切り離しが回転糸切である。(12) も同様と推定される。(14～18) 底部が大きく、切り離しがヘラナデで調整されている。(19・20) 高台付である。(20) 底部がほぼ水平で、底辺部より口縁部まではわりあい垂直に立ち上がる。他の壺よりも法量が大きい。

壺・甕は体部破片資料であり大きさなど不明である。(22) 短頸の壺と推定される。頸部は5cmと小さい。(23) 壺の頸部はほぼ垂直に立ち上がり、口唇部が外反し直立する。

(21) 甕の口縁部は、大きく外反し口唇部が内外に直立する。(24・25・28) 甕の外面は縦方向の条線のタタキ・内面は同心円アテである。(27) 甕底部片は高台付で、内外面ともにナデ・ハケ目調整がある。(29) 甕の外面は格子状のタタキ、内面は横方向のアテがある。

赤焼土器、壺・甕・鍋 (第15・16図 図版30~61)

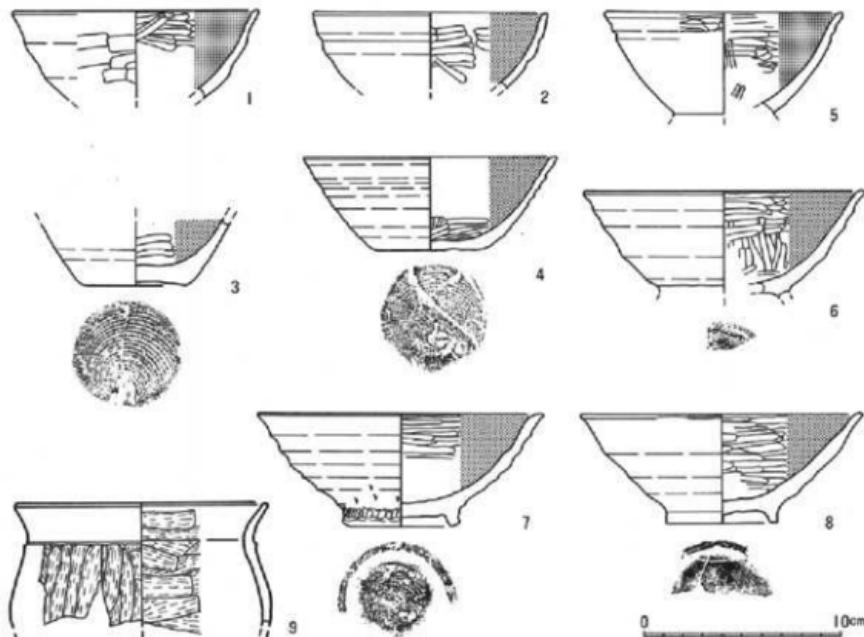
壺はすべてロクロ成形によるもので、器内外面ともにロクロナデ、底部切り離しは回転糸切りである(30を除く)。(30)器高が3.7cmと低く、底部切り離しが静止糸切である。(32)底辺部から口縁部にかけて緩やかに外反する。底部に墨書があるが判読できない。(35)垂直にちかい立ち上がりをもち口径が小さい。体部外面に墨書があるが判読されない。

甕(45~47) 口縁部15cm前後、器高20cm以内と小ぶりである。(45~49・51・52) 内外面ともにロクロナデである。(47・48・51~54) の口唇部は外反し、丸みを帯び垂直に立ち上がる。(50) 口唇部は一旦外反し、丸みを帯び内湾する。(48) の口唇部は一旦極端に外反し再び、内側に薄く口縁部が直立する。(54) 外面タタキ後にヘラケズリ、(55) 外面に縱方向のケズリが顕著に認められる。

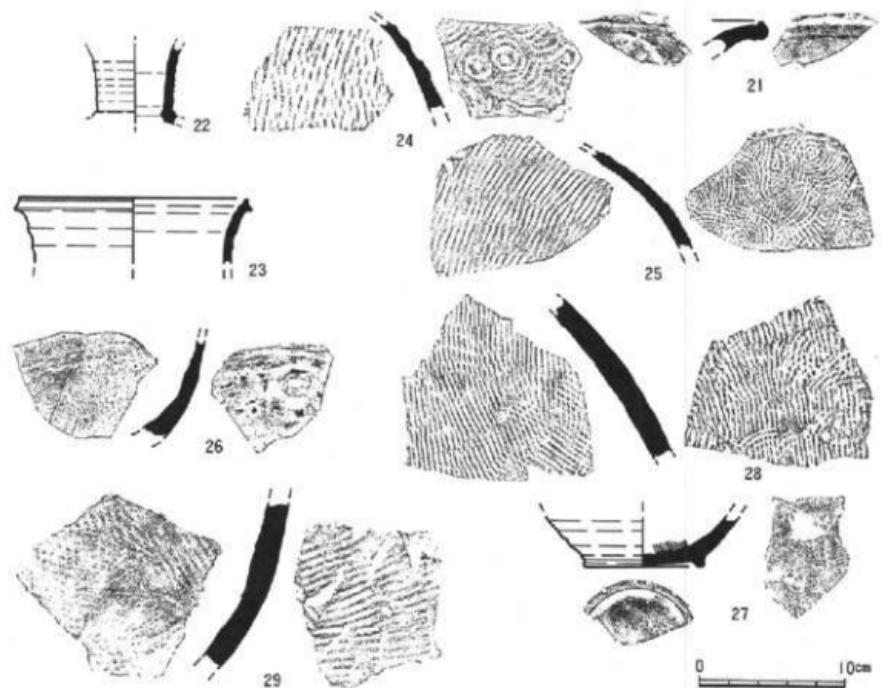
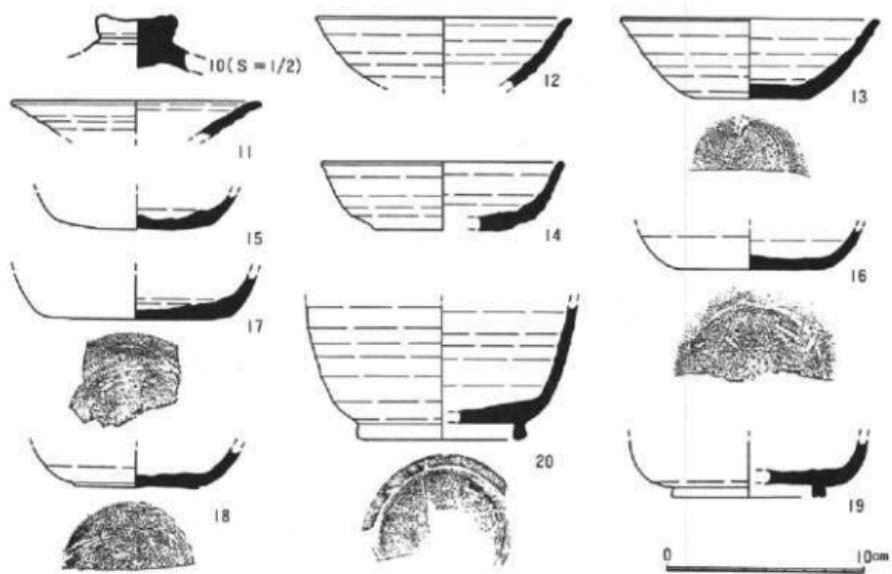
鍋(56) 口唇部が外反し、口唇部が直立する。(58) 口唇部を上下につまみだす。(60) 口唇部が急激に外反する。(61) 口縁部が外反し、口唇部が外反し、口唇部が再び緩やかに外反する。

2 その他の遺物

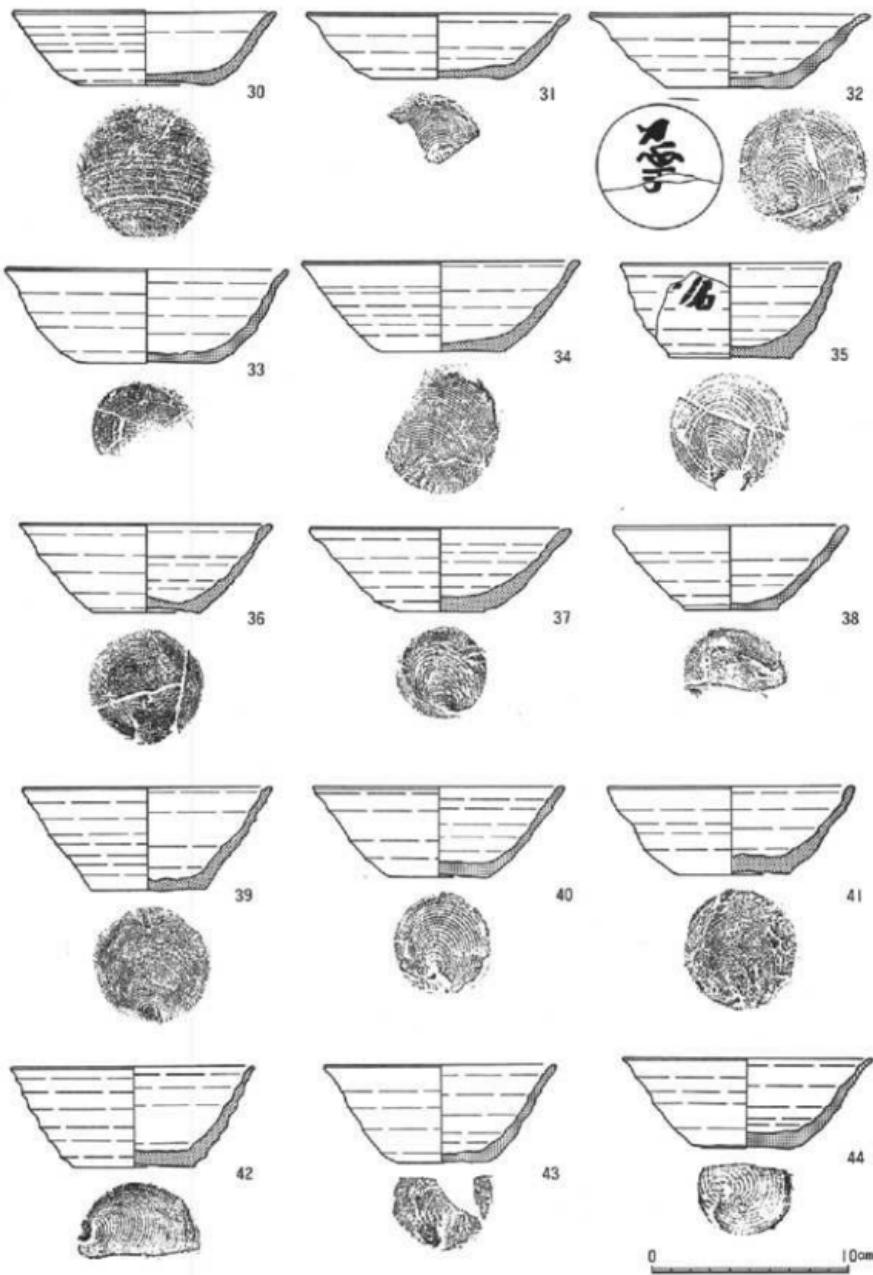
(62) 羽釜は鶴が付されている。上半部1/4のみであり、(63) 焼台は赤褐色を帯び、輪積跡が顕著にみられる。土製品に土錘・土製リング、石製品に磨製石斧・石斧・砥石、中世陶器、古銭、種子、鉄製品などがある。



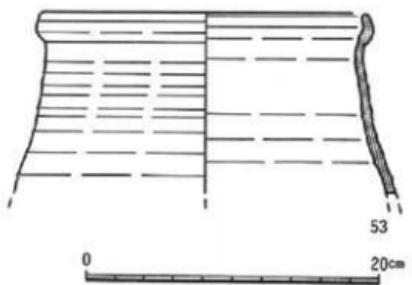
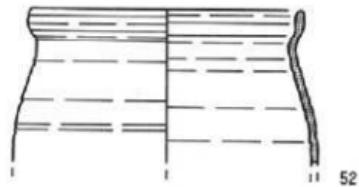
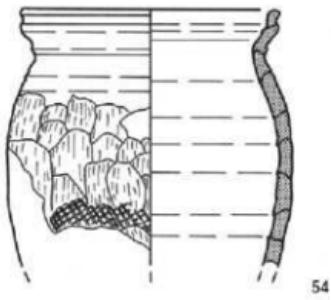
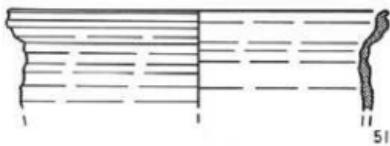
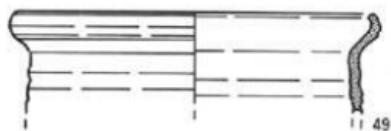
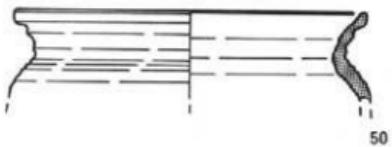
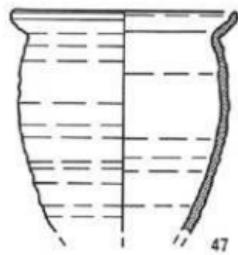
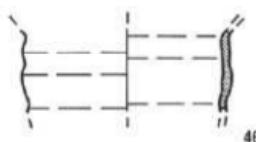
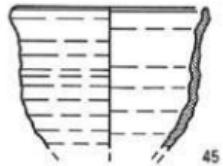
第13図 出土土器(I)



第14図 出土土器(2)

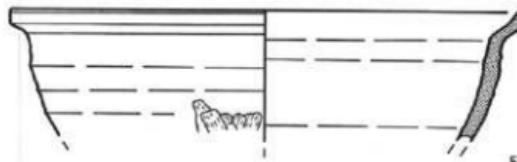


第15図 出土土器(3)

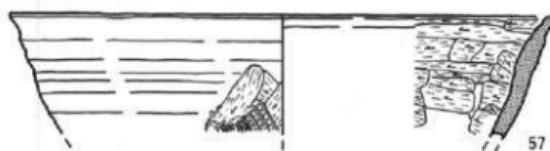


0 20cm

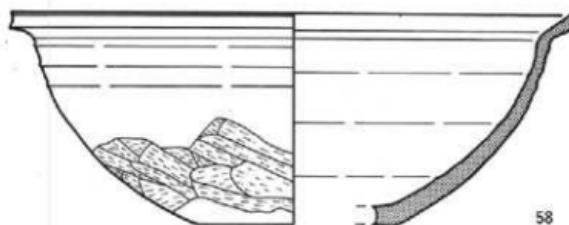
第16図 出土土器(4)



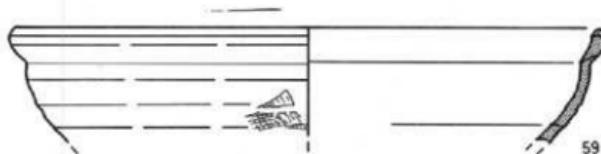
56



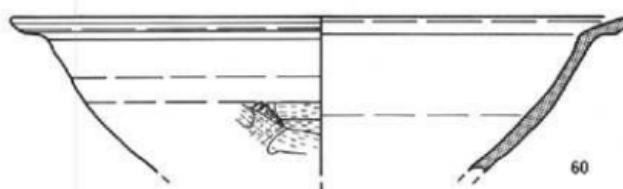
57



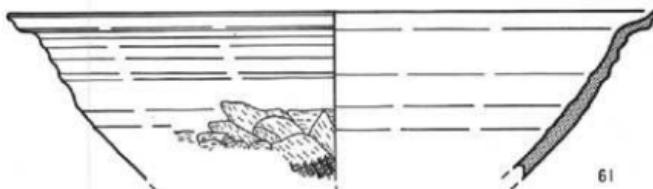
58



59



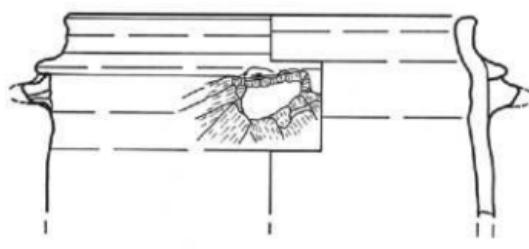
60



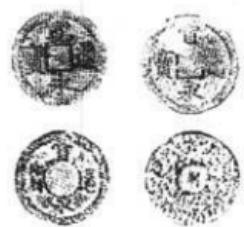
61

0 20cm

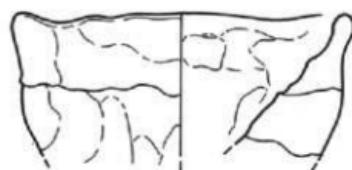
第17図 出土土器(5)



62(1/3)



(1/1.5)



63(1/1.5)



(1/3)



(1/1.5)



(1/1.5)



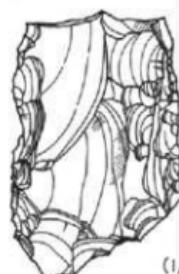
1



1



(1/3)



(1/1.5)

第18図 出土遺物

表2 遺物観察表

持 物 番 号	器 種	計測値 (m/m)			色 調	胎 土	焼 成	底 部 切 離	調整技法		備 考	出土地点 層 位
		口径	底径	器高					外 面	内 面		
		(126)	(45)	灰黄	鐵 青	良			ヘラミガキ	ハサミカツ スルセラフ		S K41-F
第 13 國	土 陶 器	环 (120)	(40)	灰	粗砂混	良			ナ	デ	ヘラミガキ	S D300
		环 54	(33)	灰黄	鐵 青	密	良	圓板表記号	ナ	デ	ヘラミガキ スルセラフ	S D300-F3
		环 (129)	54	47	淡黄	粗砂混	良	圓板表記号	ナ	デ	ヘラミガキ スルセラフ	R P 2
		高台坏 (122)		(43)	にい・透	粗砂混	良	紅 白 相 間	ナ	デ	ヘラミガキ スルセラフ	S D135
		高台坏 (145)	(66)	(53)	黄灰	粗砂混	良	ナ	デ	ヘラミガキ スルセラフ	S D300	
		高台坏 (149)	(61)	57	透視	粗砂混	良	圓板表記号	ナ	デ	ヘラミガキ スルセラフ	R P 21 R P 22 R P 23 R P 24 R P 25 R P 26 R P 27 R P 28 R P 29
		高台坏 (144)	(58)	55	灰黄	粗砂混	良	圓板表記号	ナ	デ	ヘラミガキ スルセラフ	S D300-F3
		甕 (170)		(85)	にい・透	粗砂混	良	ナ	デ	ヘラミガキ スルセラフ	R P 16	
		甕 (129)	(17)	灰	粗砂混	堅			ナ	デ	内面墨板	S K21
第 14 國	頃 陶 器	环 131	(35)	灰白	鐵 青	密	堅		ナ	デ	R P 30	S D300-F3
		环 133	59	41	灰	粗砂混	堅	圓板表記号	ナ	デ	R P 28	S D300-F3
		环 (125)	(71)	35	灰	粗砂混	堅	ヘラナデ	ナ	デ	S K52	
		环 (78)	(18)	所白	粗砂混	堅	ヘラナデ	ナ	デ		S D300-F1	
		环 (79)	(21)	灰	粗砂混	堅	ヘラナデ	ナ	デ	S K32		
		环 (100)	(23)	灰	粗砂混	堅	ヘラナデ	ナ	デ	8-5		
		环 64	(19)	灰	粗砂混	堅	ヘラナデ	ナ	デ	2-5		
		高台坏 (78)	(29)	灰	鐵 青	密	堅	ヘラナデ	ナ	デ	内・外面 自然	2-4
		高台坏 (146)	(86)	(67)	にい・黄	粗砂混	堅	ヘラナデ	ナ	デ	S D300	
第 15 國	赤 燐 土 器	甕		灰	鐵 青	密	堅		ナ	デ	瓶のふ 自然	3-17
		甕 (156)	(45)	灰	鐵 青	密	堅		ナ	デ	口線部のみ	S K34-F
		甕 (82)	(44)	灰	粗砂混	良	ヘラナデ	ナ	デ	ハケ目	底部堅痕	7-8
		环 135	68	27-37	赤褐	粗砂混	良	番板表記号	ナ	デ	R P 17	S D300-F2
		环 (125)	(66)	33	赤褐	鐵 青	密	堅	ナ	ア		S D300-F2
		环 (141)	64	37.5	赤褐	粗砂混	良	番板表記号	ナ	デ	R P 20 R P 21 R P 22	S K10-F3
		环 146	60	46	赤褐	粗砂混	良	番板表記号	ナ	デ	6-13	
		环 (142)	64	46	赤褐	粗砂混	良	番板表記号	ナ	デ	R P 12	S K14-F1
		环 (112)	62	49	赤褐	粗砂混	良	番板表記号	ナ	デ	墨書不明	S D300
第 16 國	赤 燐 土 器	环 (130)	56	46	赤褐	粗砂混	良	番板表記号	ナ	デ	R P 19	S D300-F1
		环 (134)	42.5	43	赤褐	粗砂混	良	番板表記号	ナ	デ	R P 22	S D300-F3
		环 121	48	43	赤褐	粗砂混	良	番板表記号	ナ	デ	S K41-F	
		环 (126)	59	52.5	にい・透	粗砂混	良	番板表記号	ナ	デ	S K200	
		环 (130)	50	47	赤褐	粗砂混	良	番板表記号	ナ	デ	R P 18	S D300-F2
		环 (125)	58	45	赤褐	粗砂混	不良	番板表記号	ナ	デ	R P 21	S D300-F3
		环 (124)	(62)	51.5	灰白	粗砂混	不良	番板表記号	ナ	デ	R P 27	S D300-F3
		环 (120)	46	50	橙	粗砂混	良	番板表記号	ナ	デ	内側板太・外側 板太	S K12
		环 (130)	47	46	赤褐	粗砂混	良	番板表記号	ナ	デ	S D300-F3	
第 17 國	赤 燐 土 器	甕 (131)		(95)	暗褐	粗砂混	良		ナ	デ	内・外 板太・内・外 板太	S D300-F2
		甕 (54)		赤褐	粗砂混	不良			ナ	デ		S D300-F1-2
		甕 154	(158)	赤褐	粗砂混	良			ナ	デ		S K10
		甕 184	(47)	にい・黄	粗砂混	良			ナ	デ		S K10
		甕 (245)	(70)	橙	粗砂混	良			ナ	デ	R P 16	S K200
		甕 (240)	(60)	赤褐	粗砂混	良			ナ	デ		S D300
		甕 (259)	(68)	にい・透	粗砂混	良			ナ	デ	R P 16	S K200
		甕 (184)	(166)	赤褐	粗砂混	良			ナ	デ		S D300
		甕 (230)	(124)	暗褐	粗砂混	良			ナ	デ	R P 23	S D300-F3
第 18 國	赤 燐 土 器	甕 176	(177)	にい・透	粗砂混	良			ナ	デ	R P 3	2-18
		甕 (166)	(266)	にい・透	粗砂混	良			ナ	デ	R P 30	S D300-F1-2
		甕 (85)	(82)	赤褐	粗砂混	良			ナ	デ		S D300
		甕 (38)	(82)	赤褐	粗砂混	良			ナ	デ	R P 16	S K200
		甕 (400)	(78)	赤褐	粗砂混	良			ナ	デ	R P 29	S D300-F3
		甕 (416)	(105)	赤褐	粗砂混	良			ナ	デ	R P 9	E P56-F1
		甕 (488)	(116)	赤褐	粗砂混	良			ナ	デ	R P 9	E P56-F1
		甕 (208)	(102)	赤褐	粗砂混	良			ナ	デ		S D300
		甕 台 (88)	(38)	赤褐	粗砂混	不良			ナ	デ		S K180

V まとめ

今回の調査は、平成2年度県営ほ場整備事業（月光川右岸地区）に係る大坪遺跡の緊急発掘調査成果をまとめたものである。

現地調査は、平成2年4月23日～同年6月29日まで延べ45日間にわたって実施した。遺跡の所在地は、山形県鮎川郡喜多方町大字野沢字大坪に位置し、標高約11mを測る。調査面積は3,000m²である。

遺構及び遺物の検出は、調査区の中央部、ほぼ東西方向に台地状の微高地になっているA調査区南半・B調査区北西側（2～8・6～20G）付近に集中している。遺構のほとんどがIII層上面からの検出である。本遺跡の集落は、この東西方向の微高地に広がりをもつものと推定される。

建物跡は4棟検出された。建物跡4棟すべてが、掘立柱建物跡（SB1～4）で、東西2間、南北3間（SB1）、東西2間、南北2間（SB2）である。この2棟はほぼ南北に長軸をもつ。SB3・4は重複して検出している。

土壌は多数検出している。平面形は円形・楕円形・不整形を呈し、規模1m～3mを測る。壁の掘り方はほぼ垂直であり、床面もほぼ平坦である。土壌床面からの出土遺物は少なく、上部層1～2層の出土が多い。重複して検出され時期差が考えられるが、性格・内容などは不明である。

溝跡は数基検出しているが、規模（長さ・幅）が小さく、遺物の出土も少ない。河川跡（SD300）は調査区外にも及び全体を把握するまでには至らないが、遺物の出土状況から判断すると、当遺跡でも新しい範疇に属すると推定される。

出土遺物には、磨製石斧・石器（縄文時代）、土師器・須恵器・赤焼土器（平安時代）などがある。時期は土器より、10世紀中頃から後半、平安時代後半期の所産と考えられる。

参考文献

- 山形県教育委員会（1989）『小深田遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第140集
- 山形県教育委員会（1989）『浮橋・下長橋遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第141集
- 山形県教育委員会（1989）『下長橋遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第145集
- 山形県教育委員会（1988～1989）『大橋遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第121～139集

図 版



遺跡遠景(東より)



遺跡遠景(北より)



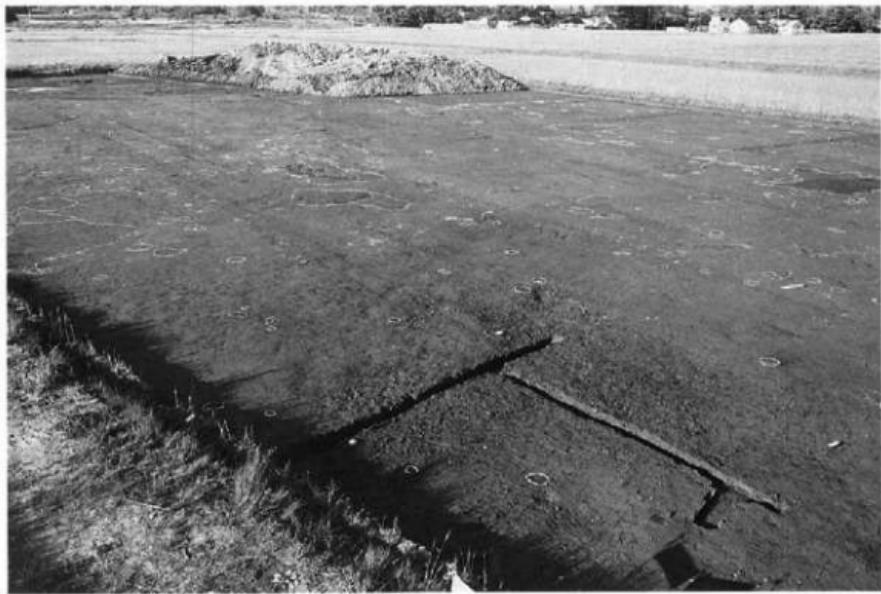
遺跡近景(南より)



調査風景(南より)



遺構検出状況(南より)



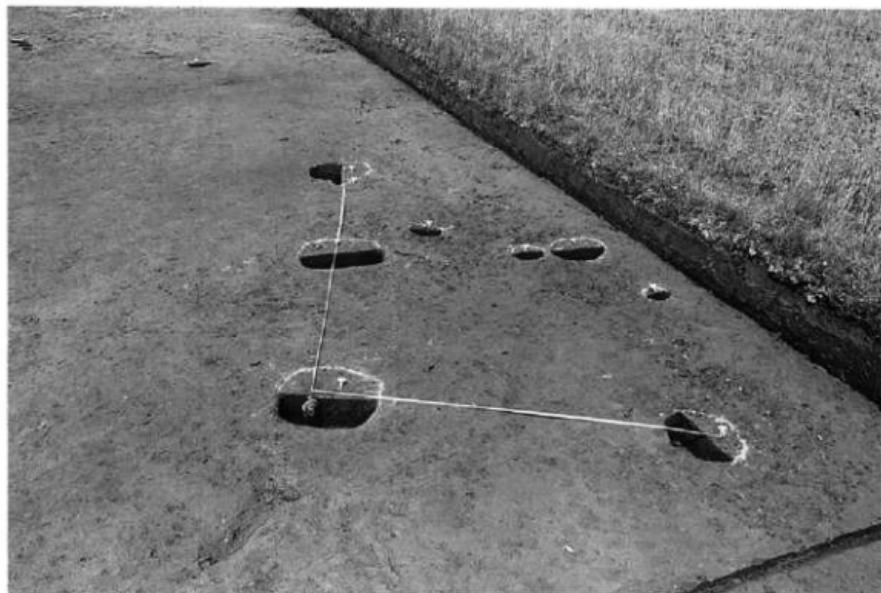
遺構検出状況(南より)



SB 1 建物跡(南より)



SB 2 建物跡(南より)



SB 3・4 建物跡(南より)



調査区全景



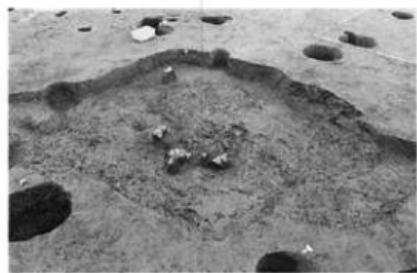
SB 1・2 建物跡(南より)



調査区全景(南より)



SK10+11 土層セクション(東より)



SK10 完堀状況(町より)



RP20 出土状況



SK10 RP20 出土状況



SK12 土層セクション(南より)



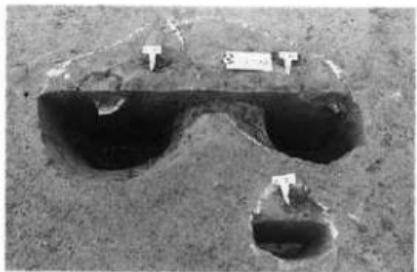
EP30完掘状況(南より)



EP28・29土層セクション(南より)



EP26・61土層セクション(南より)



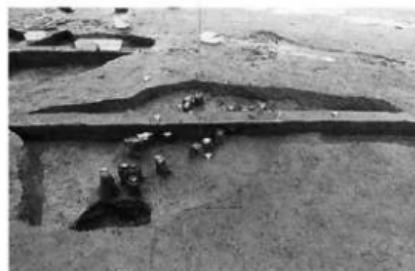
EP33・34土層セクション(南より)



SK51～SD55 × 3(東より)



SK31・32発掘状況(西より)



SK31・32土層セクション(西より)



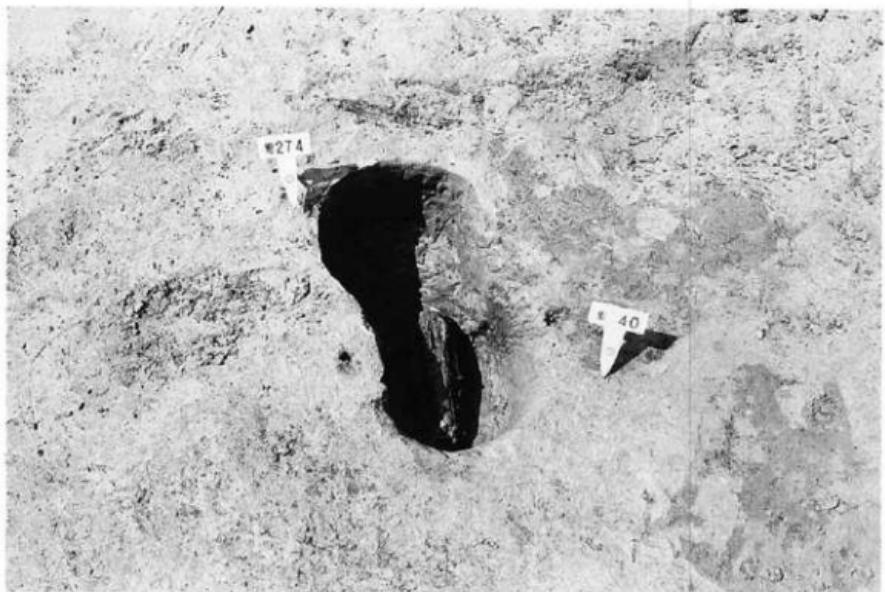
SK31・32付近(南より)



SK32 RP4.5出土状況(西より)



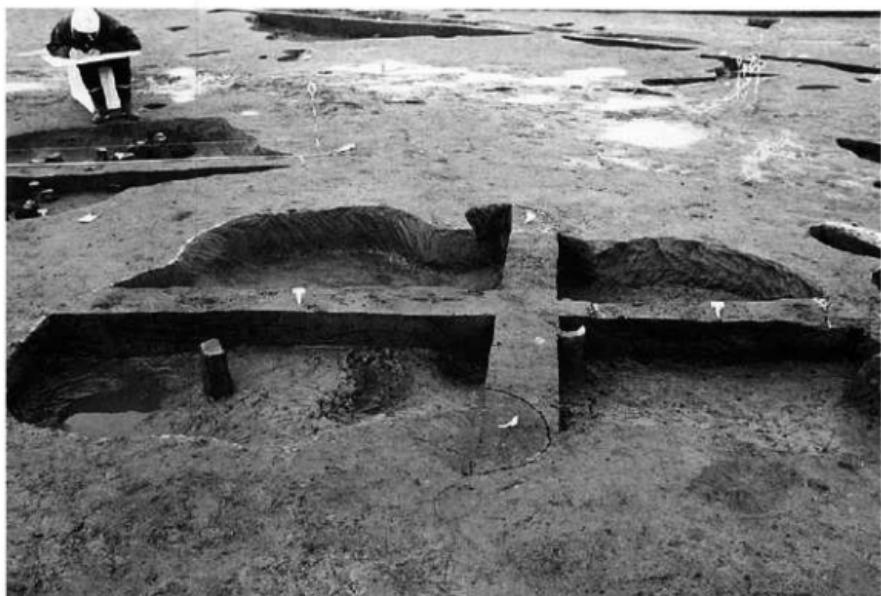
SK32土器出土状況



EP40完掘状況(南より)



EP50柱穴完掘状況(南より)



SK51・52 EP53・54(東より)



SK51土層セクション(東より)



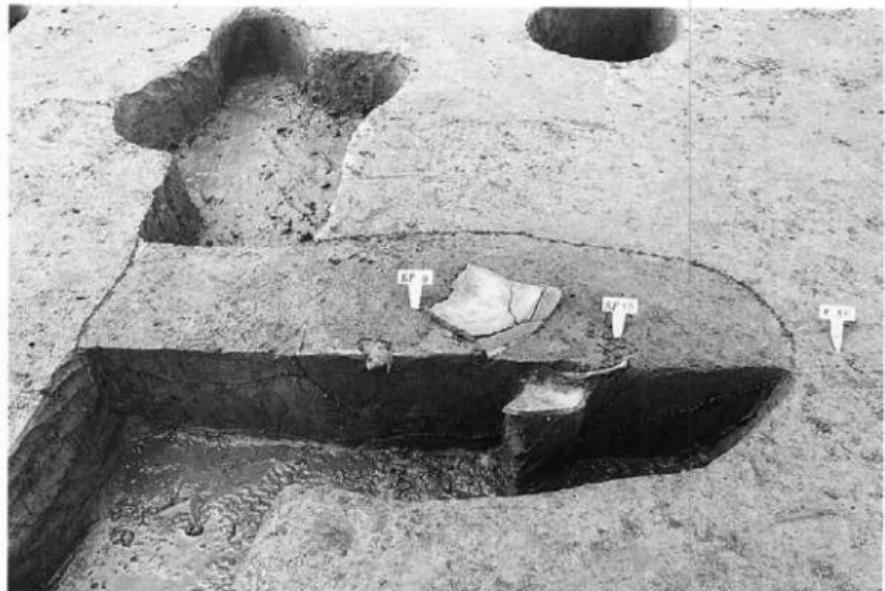
SK52土層セクション(東より)



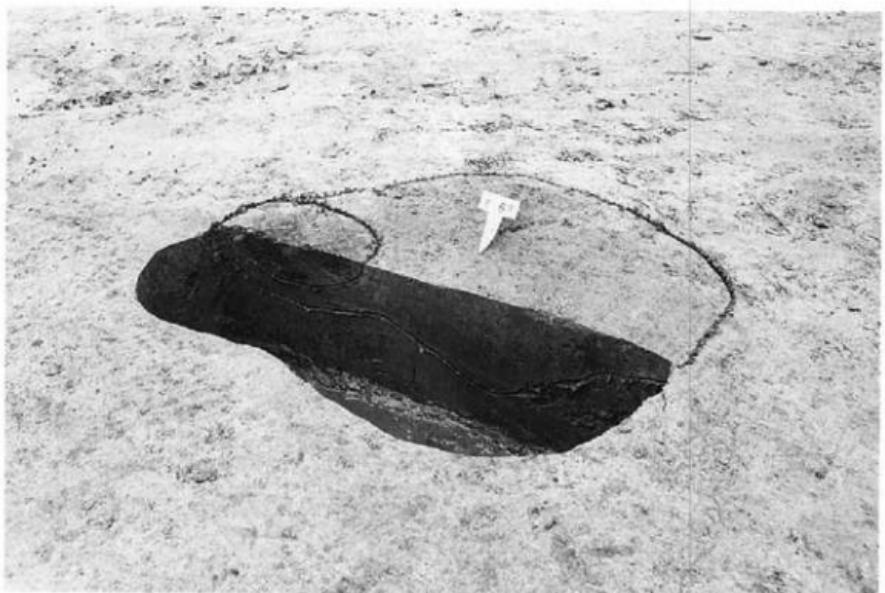
SK51・52 EP53・54(南より)



SK51・52完掘状況(東より)



SK56(RP 9・10)出土状況(東より)



EP62土層セクション(南より)



SK100土層セクション(南より)



EP120 RP 8 出土状況



SK170完掘状況(東より)



SK176・177完掘状況(南より)



SK180土層セクション(南より)



SK174完掘状況



RK174(RPII他)出土状況(東より)



RPI2・I3出土状況(東より)



SK174 EP171～173(南より)



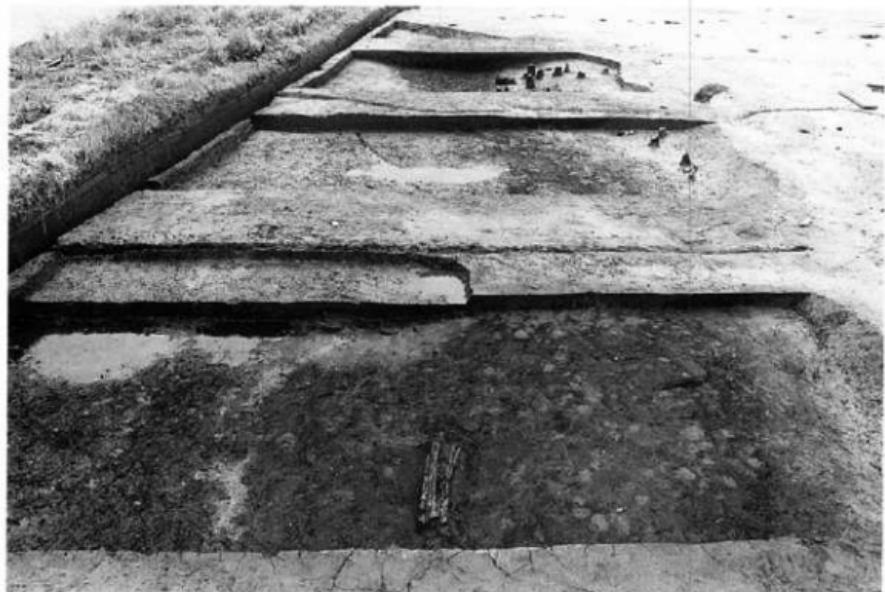
SK174完掘状況(南より)



SK200土層セクション(南より)



SK200 RP15・16出土状況



SD300河川跡(東より)



SD300河川跡(北より)



SD300遺物出土状況(南より)



SD300部材出土状況(西より)



SD300遺物出土状況(北より)



SD300河川跡東壁土層断面(西より)



SD300河川跡南壁土層断面(北より)



SD300河川跡東壁土層断面(北西より)



SD300土器出土状況(南東より)



SD300遺物出土状況(北西より)



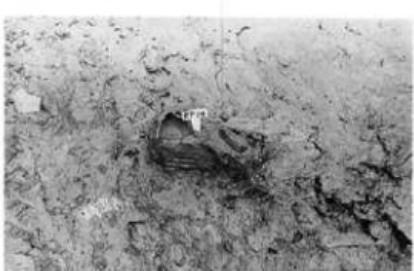
SD300土器出土状況(西より)



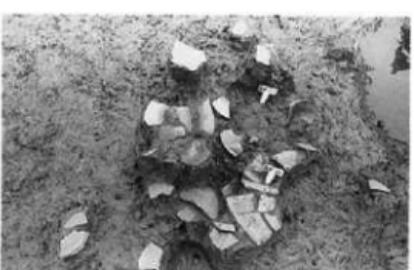
RP17出土状況(南より)



RP21出土状況(北より)



RP26出土状況(南より)



RP27・30出土状況(北より)



RP31出土状況(南より)



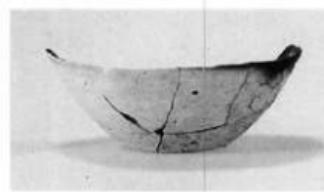
1



2



3



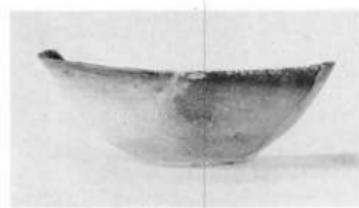
4



5



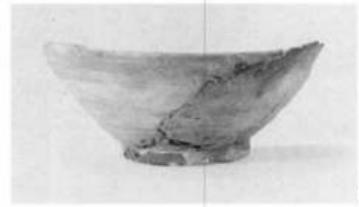
10



6



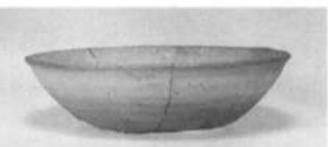
7



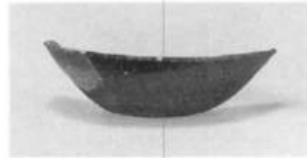
8



11



12



13



14



15



16



17



18



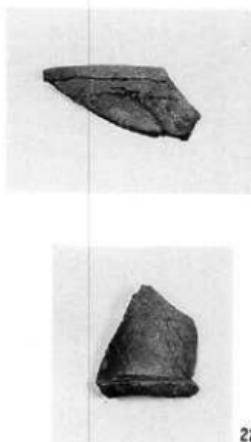
19



20



9



21



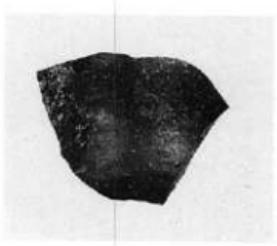
22



23



24



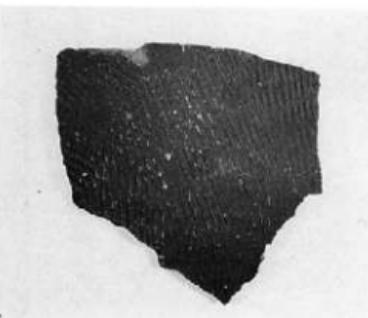
26



25



27



28



29

出土土器(2)



30



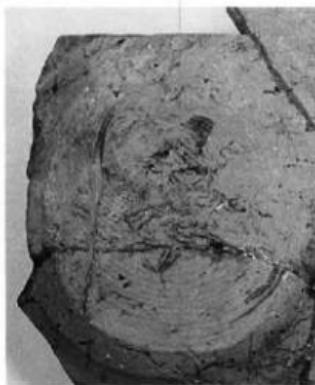
31



33



34



32



35



36



37



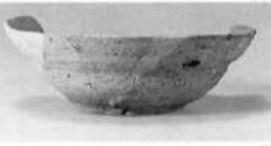
38



39



40



41



42



43



44



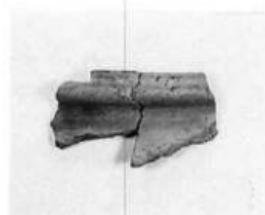
45



46



47



48



49



50



51



52

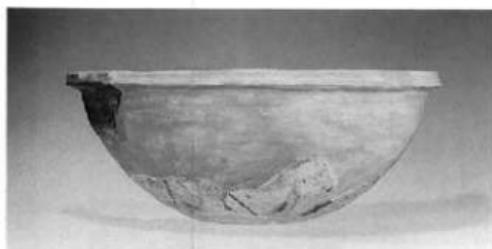
53
出土土器(4)



54



55(1/4)



58(1/6)



59



57



56



60



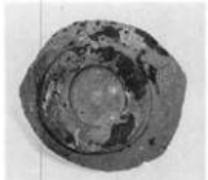
61



出土土器(5) 62



63



64



68



65



69(1/1.5)

70(1/1.5)



66



67



69



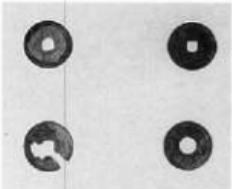
70(1/1.5)



75



71



72



76



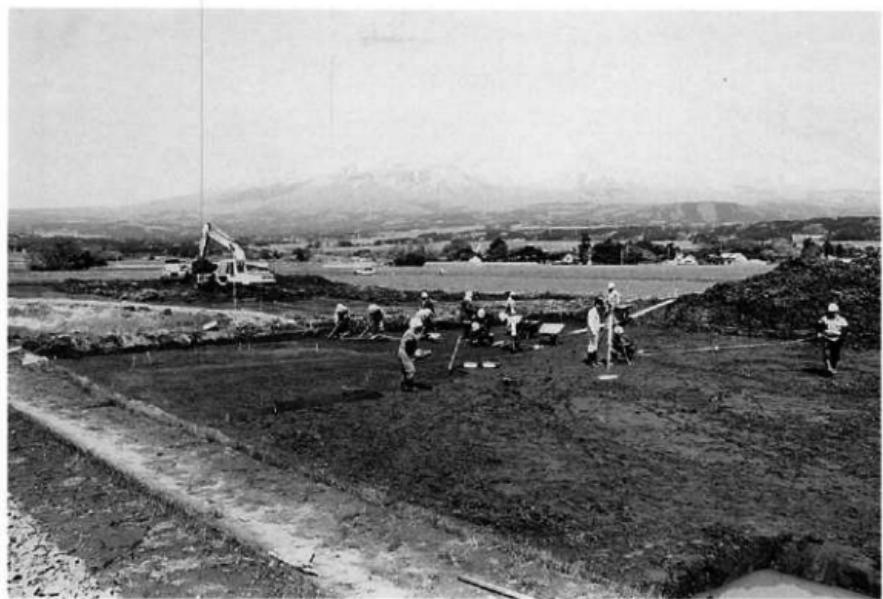
74



77



78



調査風景(南より)



調査風景(南より)



調査風景(南より)



調査風景(南より)



調査風景(南より)



調査風景(北西より)



調査風景(北より)

山形県埋蔵文化財調査報告書第166集

おお つば
大 坪 遺 跡
発 挖 調 査 報 告 書

平成3年3月15日 印刷

平成3年3月20日 発行

発行 山形県教育委員会

印刷 山形印刷株式会社
